

月 報

— 學 會 —

大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第57回集會記事

種 村 龍 夫 編

昭和16年12月21日(日曜日) 於 金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室

1) 盲人の聴力

種 村 龍 夫	山 田 文 雄
鈴 木 英 夫	手 束 和 之
櫻 井 尙 武	

余等は6名の盲人(全盲3人, 半盲3人)に就て訓練防空監視使用の適否検定の委嘱を受け, 耳鼻咽喉科學的臨牀検査, 定量的並に定性的聴力検査, 音階辨別検査

を施行し, 其實験検査の大要を述べたり. 詳細は近く原著として發表す.

2) 諸種の頭位に於ける電流性眼球震盪の發現様式に就て

加 納 進

演者は成熟家兔を圓筒型家兔固定器に自然位に固定し, 之に水平腹位, 陰極上位, 陰極下位, 頭上位, 頭下位並びに水平脊位の6種の頭位を取らしめ, 外聽道骨部に兩極性に電極を裝用して平流電氣刺激を加へて

電流性眼球震盪を發來せしめ, 以て各頭位に於ける眼震の發現現状態に就て觀察せり. 本集會に於ては其の所見の一部を述べたるも, 詳細は追つて原著として十全會雜誌に發表の豫定なり. (自抄)

3) 先天性耳瘻孔の統計

野 垣 德 次 郎

演者は富山市某軍需工場に於て, 従業員の一部に就き先天性耳瘻孔を觀察した.

調査人員3612名(男2080, 女1532名)の中, 瘻孔所有者は162名(4.49%±0.34%)で, 之を側別に見る時は右側72(45.12%±3.89%), 左側55(33.54%±3.69%), 兩側35(21.34%±3.20%)となる. 又位置的に見れば, 第1型 耳輪脚前方にあるものは, 瘻孔所有耳總數199耳の中91(45.73%±3.53%), 第2型 耳輪縁にあるものは89(44.72%±3.52%), 第3型 耳輪脚後方即ち耳介艇及び耳介腔により挟まれた隆起部に出現するものは19(9.55%±2.08%)であつた.

次に外來に於て遭遇せる瘻孔も加へ210個の瘻孔の中, 長さ1mm以下のものは145(69.05%±1.14%)の多數を占めて居るが, 長さ2mmのもの11(0.05%±0.15%), 3mmのもの10(0.05%±0.15%)となり, 長さもの程頻度は減少し, 11mm, 12mm及び15mmのものは各々1個宛の出現を認むるに過ぎず. 而して之を位置的に見れば第1型のものに最も長きもの多く, 第3型では最長4mm, 第2型では3mmのもの各1耳宛之を認めた.

次に瘻孔の化膿性に就ては, 現在化膿せるもの又は過去に於て化膿せしことあるものは, 210耳の中17

(8.10%±1.88%)であつて、其位置的關係は總て第1 型の耳輪脚前方にあるものゝみであつた。(自抄)

4) 斜鼻整形例

津 田 三 郎

22歳の男子の有する先天性斜鼻に對しヨゼフ氏法に果を擧げ得たるにより術前、術後の寫眞を供覽し、實施方法を述べたり。

5) 鼻腔異物

三 輪 清 治

2歳の女兒の左鼻腔より小指頭大多角形鑿節様異物を摘出したる1例に就き述べ、併せて最近6ヶ年間に於ける鼻腔異物に關する本邦報告例に就き其の主訴項目の明らかなるもの23例に就き統計的觀察を行ひ、鼻汁過多78%、鼻閉塞60%、惡臭鼻汁48%、鼻出血30%、頭重感17%、其他發熱、食思不振、不機嫌等の數値を擧げ、以て幼兒の鼻腔異物の早期發見に資すべきを説けり。

6) 臨牀經驗

宮 田 暎 一

(イ) 硝酸「ストリキニーネ」の中毒

68歳の男子、歐氏管狹窄症の爲約20年通院、其の間時々本劑を使用せり。

11月初旬午後4時頃本劑0.1%液0.5ccmを乳嘴突起部に注射せるに歸宅後蕁麻疹様發疹の發現と共に痒感著しく、直ちに來院せるを以て「カルシウム」靜脈注射を施行せるに治癒せり。

11月下旬本劑の注射後同様發疹と共に不安状態とな

り、舌運動障礙を認めたり。患者は間もなく治癒せるも始めて本劑の中毒なるを認識、連用に對しては注意を要すべきを述べたり。

(ロ) 小兒に於ける上顎洞性後鼻孔鼻茸

6歳の男兒に於ける右側鼻腔に於ける本症を認め、幼兒に於ける本症は比較的稀なるを述べたり。

(種村抄)

7) 篩骨蜂巢鼻腔内被細胞腫治験例

種 村 龍 夫

(演) 西 部 鮮 之 助

患者20歳女子にして左側鼻出血を主訴とす。家族歴及び既往症には特記すべきものなし。

現病歴 約1年2-3月以前より現在に到るまで時々左側鼻出血ありて外科醫に依り治療を受けたるも治癒せず、益々其の度と其の量を増し次第に貧血羸瘦加はり我教室に來る。

現症 全身貧血著明にして Wa-R 陰性。

局所々見 左鼻腔は表面平滑にして比較的可動性なる腫瘍を以て充たさる。色淡紅色硬度弾力性軟。消息すれば直ちに著しき出血を來す。

レ線寫眞所見 左側篩骨蜂巢は擴大陰影強く、左鼻腔上部も亦強き陰影を認む。

處置 鼻内並びに上顎洞より篩骨蜂巢を開放し、腫瘍全摘出を施行し、以後全身の強壯療法により本患者を全治退院せしむ。

病理組織學的に内被細胞腫と診斷せり。

終りに本邦文獻に記載されたる鼻疾患としての内被細胞腫に追加し、且つ我が教室に於ける口蓋及び外鼻道に發生せる内被細胞腫と夫々對比し、臨床上の意義に言及す。(自抄)

8) 最近10ヶ年に於ける我教室外來の急性腺窩性扁桃腺炎
及び扁桃腺周圍膿瘍の統計的觀察

進 宅 外 雄

當教室最近10ヶ年間に於ける外來患者中、急性腺窩性扁桃腺炎361名、口蓋扁桃腺周圍膿瘍167名に就きて統計的觀察を試みたり。

(I) 急性腺窩性扁桃腺炎

(I) 男性は女性より少しく多く53.33%なりき。

(II) 20歳代に最も多く、10歳代、30歳代、9歳未満の順にして40歳代以上高齢と共に減少せり。

(III) 季節的には最も多きは5月にして10月、2月の順にして一般に氣温變換期に増加せり。

(IV) 主訴としては、咽頭痛及び嚥下痛最も多く耳痛、扁桃腺腫脹、所屬淋巴腺腫脹の順なりき。

(V) 發病より來院までの経過日数は3日、1日、2日の順にして、發病を自覺せしより3日間に來訪せるものその過半数を占む。

(VI) 患者の併有せし他種耳鼻咽喉科疾患としては鼻疾最も多く、咽頭疾患、耳疾患、喉頭疾患の順にし

て急性咽頭炎、慢性上顎洞炎多かりき。

(VII) 所屬淋巴腺腫脹及び壓痛を來せるもの中、下顎角後下部に來りたるもの最も多く、且兩側性のもの最多數なり。

(2) 口蓋扁桃腺周圍膿瘍

(I) 男性に多く、且20歳代に最も多數にして、10歳未満最少なりき。

(II) 左右別の區別なく、兩側性のもの4例を見たり。

(III) 季節的には大差なきも強ひて云へば秋季より初冬に互りて比較的多數なりき。

(IV) 發病より來院迄の経過日數最も多きは7日にして、5日、3日之れに次ぎ、急性腺窩性扁桃腺炎の夫れに比し、少しく日數を経たるを見る。

(V) 所屬淋巴腺腫脹及び壓痛最も多かりしは、顎下部淋巴腺にして下顎角後下部の淋巴腺之れに次ぐ。

9) 急性扁桃腺周圍膿瘍切開術に對する一考察

勝 木 直 次

定型的部位に法の如き切開を加へ、次でシュミードン氏腸間膜結紮導子を以て扁桃腺周圍を充分に剝離し、後口蓋穹の部位に對孔を形成し、對孔部より「ガ

ーゼ」片を挿入、切開創部に達せしめ術を終る。本法に依る時に膿の瀦留を來す事なく、短時日に全治するを經驗せり。(種村抄)

10) 巨大なる「オドントーム」供覽

和 田 直 樹

顎骨に良性腫瘍として囊腫性腫瘍と共に「オドントーム」の發生することは既知のことにして、余は最近、完き形態を有する智齒に附着せる巨大なる「オドントーム」例に遭遇せり。

患者は34歳の既婚婦人にして左側下顎智齒部に發生せるものなり。

「レントゲン」所見に於て顎骨内に囊胞狀の暗影を認

め一見「アダマンチノーム」を疑はしめ、而して下顎骨下縁と腫瘍の下縁との間には約3mmの骨質を残すのみにして、實に僅微なる外力による骨折を危惧せしめしものなり。

該腫瘍所見はベルテスの分類に従へば、附着性「オドントーム」にして、長徑は2.6cm、幅徑は1.8cm、高さは2.0cm、重量4.2gを算せり。(自抄)

11) 妊娠末期(抵抗減弱期)に來れる我領域疾患の興味ある2例

勝 木 直 次

イ) デフテリー、腎炎、耳下腺及び顔面丹毒と連發

せる治験例。

28歳の女子。妊娠9ヶ月に於て咽頭「デフテリー」に罹患、9,000 単位の血清にて咽頭に於ける苔は消失せり。其後10日を経て耳下腺腫脹、尿中に蛋白あり。水溶性ズルフォミン注射、其後腎炎増悪、次で右側耳漏を來し、更に顔面丹毒を併發するに至り極力治療を加へしに、丹毒は比較的速に治癒せるも、爾餘の疾患は消長常ならざりしも分娩後比較的急速に治癒せり。

ロ) 舌潰瘍切除全治後に來れる急性肺炎死亡例。

42歳の女子。妊娠9ヶ月。7の部に舌潰瘍あり。舌動脈結紮、頸部淋巴腺摘出と共に舌潰瘍切除。經過順調なりしも、退院後4日を経て感冒發熱を來し、遂に急性肺炎を併發死亡せり。

妊娠時に於ける抵抗減弱期に際しては慎重完璧を期し、細心の注意を要すべきなり。(種村抄)

12) 前庭迷路と蝸牛殻との交渉

松 田 龍 一

前庭迷路と蝸牛角との間に直接又は間接に相互に影響することありとなす文献(例之ギョツチツヒ氏、トリオ氏)に就き綜説を試み、これらの問題に就きては

尙追試し、検討すべきものゝ殘されあるを述べ、小泉君の實驗にも少しく觸るところありたり。

金澤醫學會第180回例会

1月24日(月曜日)午後2時より金澤醫科大學法醫學講義室に於て開催、其の演題並に出演者次の如し。

結核化學療法の基礎的研究 (2601~4年)

金澤醫科大學結核研究所

岡 本 肇 松 田 研 齋
國 保 近 越 村 三 郎

演者は先づ o-Aminophenol が結核菌に對する特異的侵襲性を具有する物質なる事に就て述べ、次で此の o-Aminophenol を基礎物質とする化學療法的研究に於

て現在迄に擧げ得たる成果に就て説述する處ありたり。

詳細は追て結核研究所年報第2年に發表の豫定。

— 叙 任 ・ 辭 令 —

●宮内省
1月17日

敘從三位

特旨ヲ以テ位一級被進

●内 閣
1月15日

金澤醫科大學教授 岡 本 肇

陸級高等官二等
2月10日

金澤醫科大學教授 大 里 俊 吾

任東北帝國大學教授
叙高等官一等

●金澤醫科大學
1月4日

芳 野 貞 章
金澤醫科大學臨時附屬醫學專門部講師ヲ囑託ス